

Title	日中戦争前期における華北農村と中国共産党：河北省涿源県の「800日」
Author(s)	田中, 仁
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76715
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日中戦争前期における華北農村と中国共産党

——河北省涿源県の「800日」

田 中 仁

はじめに	389
I 地政空間としての涿源	390
II 「涿源県の800日」と言う立論は可能か？	392
III 資料の問題	396
IV 県志に見る「涿源県の800日」	397
V 組織史資料に見る「涿源県の800日」	398
VI 中共県委文献に見る「涿源県の800日」	399
VII 4枚の写真から見る「涿源県の800日」	404
VIII 中国抗日戦争と涿源の抗戦	407
IX 涿源をめぐる戦争と革命の記憶	408
まとめ	410

はじめに

日中全面戦争期の中国政治は、「抗日」を共通課題とする国民党と共産党（中共）との政治的連携を前提として、中国が有するあらゆる資源を「抗日」のために動員することを基本的特質としていたが、国民政府軍が軍規違反を口実として中共系の新四軍を殲滅した1941年の皖南事件は国共関係に甚大な衝撃を与えるとともに、中国政治を大きく変容させることになった。以前筆者は、1938年11月7日（中共6期6中全会終了後）から41年1月5日（皖南事変発生の前日）の797日（「800日」）にいたる中共権力の中枢部分の実態（書記処と中央委員会の関係、「中央」の意味、党軍関係と軍事委員会、毛沢東の指導権）について考察を加えた⁽¹⁾。この課題設定は、1949年の国家権力奪取を可能にする中共の

権力編成が1940年代前半期の延安整風運動により実現したことをふまえて、その前段階にあたる800日間における中共権力の実態解明が、1950年代から70年代にいたる毛沢東時代の中国政治の構造と特質を検討するうえで有意であろうという推断によるものであった。

この研究課題を深めるため、本稿では、河北省涿源县を素材として同時期における中共の基層部分の実態について検討する。

河北省涿源县は山西省との省境地域、太行山脈中の小盆地である（図1）。日中全面戦争勃発後、同県は、察南自治政府・晋北自治政府および山西省と接する地点に位置し、同時に八路軍が太行山脈を拠点に河北平原に展開するうえで重要なポイントにあったため、日本軍と八路軍との間の典型的な係争地域となった（図2）。このことは、本稿が対象とする涿源县の「800日」に関わる事象—（1）黄土嶺戦闘と阿部中将の戦死、（2）ノーマン・ベチューンの記憶、（3）日本軍の拠点・東団堡の奪取、（4）王二小言説の形成と展開—がいずれも単なる地方事件ではなく、中国抗日戦争全体（あるいはその語り）に関わる出来事であったことによっても理解することができよう⁽²⁾。

本稿では、日中戦争前期の涿源县の実態を、a. 中共涿源县委員会が作成した数件の報告書、b. 「楊成武回想録」などの回想資料、c. 「涿源县志」「中共涿源县組織史資料」などの編纂資料などによって復元するとともに、上述した涿源县の800日に関わる（1）～（4）の事象が、「戦争と革命の記憶」として今日の涿源でどのように位置されているのかを確認する。

I 地政空間としての涿源

涿源县を素材として1980年代以降の県レベルにおける市場・社会と行政管理の展開過程を検討した〔楊雪冬2002〕は、日中全面戦争前期と今日の涿源を次のように概括している。



図1 涿源县の位置

涿源県の基本的特徴を「山区・老区・貧困区」と概括することができ、1998年現在、17郷鎮・285行政村で構成され人口は26万人である。[72]

1934年最初の党組織が組織された。七七事変後、八路軍115師独立団が涿源に抗日民主政府を樹立、晋察冀辺区と八路軍第1軍分区の主要構成部分となり、2度「対敵鬭争模範県」の命名を受けた。抗日戦争期、涿源県は何度も日本軍の掃討を受けたが、中共の指導の下で政権建設を着実にを行った。すなわち減租減息（1938）、三三制選挙（40）、42村幹部選挙（42）、43精兵簡兵（43）などである。1945年に全県が解放されたとき、党支部251、党員13829人⁽³⁾にのぼった[73]。

1985年と86年、国務院と省政府は、涿源県を重点的援助を要する貧困県に指定した。貧困人口は、84年の19.9万人から98年の3.1万人に減少した[74]。

日中全面戦争前期における地政空間としての涿源県は、以下に述べる3点の特色を有していた。

第1に、日中全面戦争勃発後、日本軍は華北地域に対する占領するとともに親日協力政権を樹立していった。すなわち、1937年9月に察南自治政府、10月に晋北自治政府を樹立、11月には両政権をふくむモンゴル連盟自治政府が樹立された（蒙疆政権）。12月、これとは別に北平に中華民国臨時政府が樹立される。河北省涿源県は、山西省との省境地域であるのみならず、察南・晋北両政府との境界地域に位置していた（図2）⁽⁴⁾。

第2に、中国政治史の文脈から言えば、1937年9月の第2次国共合作成立後、八路軍に再編された中共軍は黄河を東渡して前線に出動する。閻錫山ら山西省実力派との統一戦線構築（山西新軍と決死隊）に成功した八路軍は太行山地区に進出、華北平原への展開を伺う態勢をとることになる（図3）。

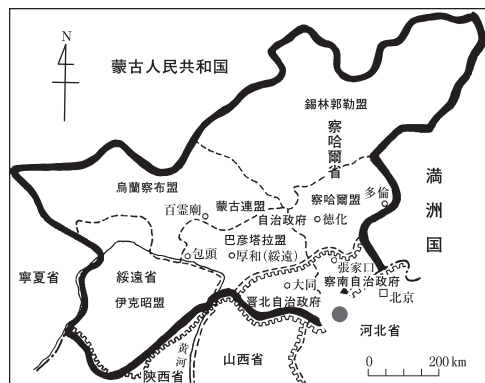


図2 蒙疆政権と涿源県 [江口圭一1988: 61] に加筆

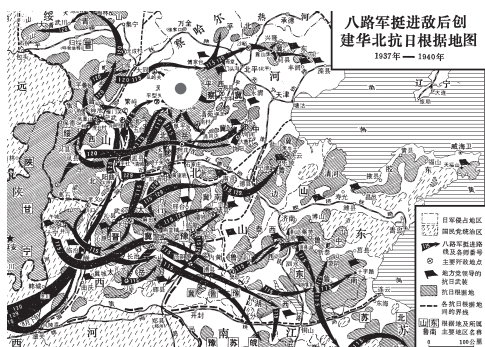


図3 八路軍の華北進出と涿源県 [郭利民編1993] に加筆

第3に、こうして涑源は日本軍・八路軍の軍事行動が交差する焦点となったのであるが、1937年9月に日本軍が県城を最初攻略した時、国民政府の守備部隊と政府スタッフは涑源から撤退する。これ以降日中全面戦争期全体を通じて、国民政府軍は涑源県に戻ってくることはなかった。このため日中全面戦争期の涑源は、軍事的には日本軍と八路軍との対立という基本構図のもとに置かれることになる。

II 「涑源県の800日」と言う立論は可能か？

前稿 [田中2008, 2009] における「800日」という立論は、中共中央での画期を前提としたものであった。これに対して本稿は、日中全面戦争前期における基層部分での中共組織の実態の検討を目的としているのであるが、果たして「涑源県の800日」という立論は成立するのであろうか。また県を考察対象とすることにどのような意味を付与することができるのであろうか。さらに「涑源県」に着目することの意味をどこに求めうるのであろうか。

[晋察冀ほか編1988] は、晋察冀抗日根拠地の樹立と発展が次の4段階を経たとする [8]

- (1) 樹立段階：1937年の「七七」事変から1938年10月に日本軍による二十五路包圍攻撃の粉碎まで
- (2) 強化段階：1938年10月から1940年末の「百団大戦」終結まで
- (3) 困難な闘争と回復の段階：1941年初めから1943年末の日本軍による「壊滅掃討」作戦の粉碎まで
- (4) 局部反攻・全面反攻と大発展の段階：1944年初めから1945年9月の抗日戦争勝利まで

この4段階は日中全面戦争期における中共系軍隊の推移を示す図4に相応するものであり⁽⁵⁾、また、本稿が対象とする「涑源県の800日」は、晋察冀抗日根拠地の第2段階（強化段階）に附合すると判断してよいであろう。

それでは、この晋察冀抗日根拠地の「樹立段階」と「強化段階」はどのようなものであり、涑源県とその「800日」はそのなかでどのような位置にあったのであろうか。

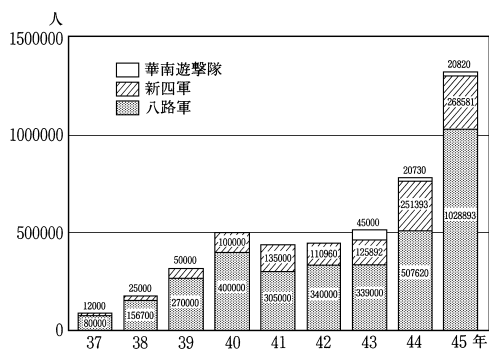


図4 中共系軍隊の推移 [池田ほか2002: 129]

1 樹立段階⁽⁶⁾

1937年8月下旬、八路軍115師、120師、129師は華北の前線に出動した。9月25日、115師は山西省東北・平型関で抗日戦争勃発後の最初の勝利をあげた。10月、115師主力は八路軍総部とともに娘子関方面に南下、これに対して副師長・政委聶榮臻は五台地区に留まり、師独立団・騎兵營・教導隊・総部特務団2連・343旅・120師359旅工作団など2000人によって抗日根拠地樹立に着手した（中共北方局は王平・李葆華・劉秀峰を派遣、晋察冀臨時省委を樹立した）⁽⁷⁾。11月、晋察冀軍区（聶榮臻司令員兼政委）が五台に成立、4軍分区がおかれた（図5）。

11月、晋察冀省委（書記黄敬）が阜平に樹立、軍区機関も阜平に移転した。12月、日本軍20000人による八路圍攻を撃退、こうして平綏・正太・同蒲・平漢各鉄路に囲まれた晋察冀辺区の中心地区が初歩的に形成された⁽⁸⁾。

1938年1月、晋察冀辺区軍政民代表大会が阜平で開催され、辺区臨時行政委員会（臨時政府）が樹立された。このことは第2戦区司令長官閻錫山から国民政府行政院に伝達された。1月31日、行政院は晋察冀辺区行政委員会を承認・批准、こうして辺区政府が成立した。辺区政府は冀西・晋東北・冀中政治主任公署（專署）設置するとともに県長を委任した（図6）。

4月、晋察冀辺区省委は辺区第1次党代表大会を開催、冀中区も第1次党代表大会を開催した。3-6月、農・工・婦・青各界救国会が相次いで成立、会員数は100余万人にのぼった。

日本軍は、武漢・広州作戦に並行して「五台北圍」作戦を展開、50000人を動員して25路から晋察冀の腹地である五台・阜平・涿源などを攻撃した。これに対して、人々は120師359旅などと呼応して抵抗、48日の激戦で少将旅団長・常岡寛治ら5300人を殲滅した⁽⁹⁾。

この時期、2政治主任公署、3專署、72抗日県政府が樹立され、人口は1200万人を擁した。

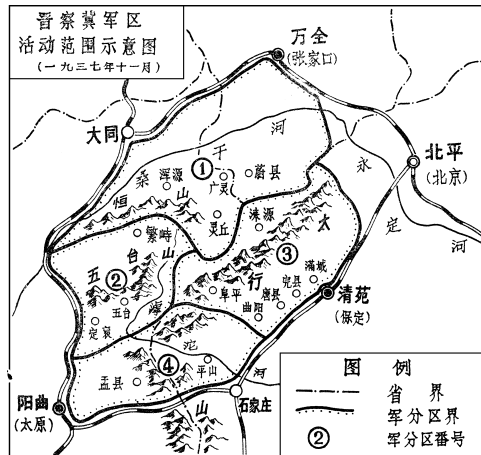


図5 晋察冀軍区の成立 [河北省ほか編1983]

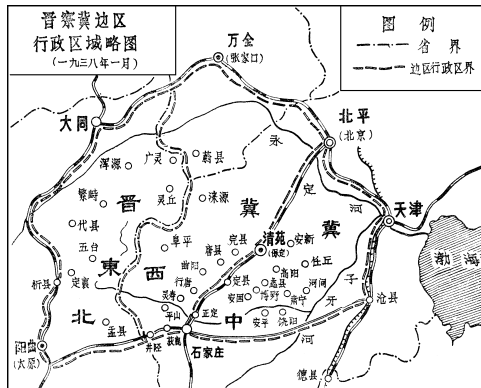


図6 晋察冀辺区政府の成立 [河北省ほか編1983]

中共6期6中全会は、晋察冀抗日根拠地を「敵後の模範的な抗日根拠地、統一戦線の模範区」と評価した。

2 強化段階⁽¹⁰⁾

戦局は、1938年秋の武漢失陥を契機として対峙段階に入った。これにともない日本軍は新たな占領方針を採用、華北地区に常駐部隊30万を駐留させ、1938年冬から40年春にかけて晋察冀根拠地を主たる対象とする3回の「治安肅清討伐作戦」を展開した。すなわち冀中平原根拠地に対する5回の大包圍作戦（1938年11月～39年4月）⁽¹¹⁾、五台・涞源・易県地区および平西地区における「肅正」作戦（39年5～6月）、晋察冀辺区の中心区に対する冬季「掃討」作戦（39年10～12月）がそれである。

この時期、国民政府の対日方針は「消極抗戦・積極反共方針」に転換した。これを受けて鹿鐘麟河北省主席・冀察戦区総司令は、冀中政治主任公署・冀南主任公署を不承認とし、このことは国共間の「摩擦」を発生させることになった⁽¹²⁾。

1939年1月、中央北方分局（晋察冀分局）が成立、そのもとに3区委（晋察冀、冀中、冀熱察）が設置された。また辺区第2回党代表大会が開催され、中共6中全会の精神をふまえた新方針が制定された。

平漢線以西の晋察冀軍区では、1939年5～9月の反掃蕩作戦に120師359・358旅を投入、また10～12月の反冬季掃討作戦には第1分区所属部隊のほか120師特務団によって応戦し雁宿崖・黄土嶺の戦闘では阿部中将が戦死した。

1940年7～10月の「民主大選挙」運動は、前年の北方分局青山組織会議をふまえて展開された。また8月の北方分局「關於晋察冀辺区目前施政綱領」（双十綱領）は、晋察冀抗日根拠地における基本方針と位置づけられた。8～12月の百団大戦には晋察冀辺区の46団が参加した。

この時期、領域の拡大とともに晋察冀（北岳）・冀中・冀熱察3戦略区を構築、1行署・1弁事処・13専署・90県政府が組織され、人口1500万人を擁するようになった（図7）。

ここで、この晋察冀抗日根拠地の「樹立段階」と「強化段階」における特質、および「涞源県の800日」の位置づけを確認しておこう。

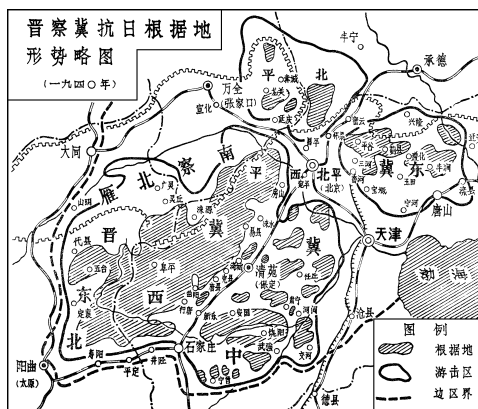


図7 晋察冀抗日根拠地（1940年）[河北省ほか編1983]

晋察冀抗日根拠地は、晋綏、晋冀（魯）豫、山東の各根拠地とともに、八路軍によって樹立された根拠地であり、1937年10～11月、平型関戦闘のあと五台地区に留まった115師副師長・聶榮臻とともに留まった師独立団ら諸部隊によって樹立された。同根拠地は、太行山脈に沿った山岳地区（晋東北・冀西）、華北平原地区（冀中）、および張家口—北平—天津を結ぶ平綏・北寧鐵路以北の冀熱察地区に3区分できるが、五台・阜平を中心とする山岳地区が根拠地の中枢部分を構成していた。

3 「樹立段階」における涿源県

涿源県は阜平県の隣県で、阜平県の北東部で県境を接している。ここで晋察冀抗日根拠地の「樹立段階」における涿源県の状況を示す〔県志1998：24-25〕。

- 1937.8.28 日本軍3機、県城を爆撃
- 9.13 日本軍第5師所属の第9旅団、県城を攻撃。国民党29軍1個連が抵抗するも日本軍入城（県政府スタッフ、南方に退去）。
- 9.25 八路軍115師楊成武独立団、馭馬嶺西方で涿源から平型関への増援に向かう日本軍を阻止（日本軍400を撃破、残兵は県城に戻る）。
- 10.10 楊成武独立団1個營便衣隊、県城を夜襲、日本軍部隊は東逃（八路軍、県城に入る）
- 10.11 涿源県抗日民主政府、城東大廟で成立（県長：王茂斌）
- 10下旬 楊成武独立団、涿源を中心とする抗日根拠地を樹立、部隊を独立第1師に拡編。
- 11中旬 最初の人民武装：涿源遊撃支隊成立。
- 11.25 楊成武独立師2団、王安鎮の日本軍拠点を強襲、500余を殲滅。
- 11下旬 日本軍、13路に分かれ根拠地を掃討、涿源県城を占領。のち楊成部部隊、ふたたび回復。
12. 中共涿源県委成立（書記兼宣伝部長：梁正中）。白石口・挿箭嶺・靈吉・黒山など18基層支部を組織。
12. 涿源人民抗日救国会成立
- 1938.3.18 日本軍第4歩砲騎連隊、紫荊関から涿源根拠地を侵犯（涿易・涿蔚公路の打通を図る）。
- 3.24 日本軍、二道河で民衆28人を虐殺（二道河事件）。
- 3.26 八路軍、王安鎮の日本軍拠点を攻撃（日本軍300余を殲滅）。
- 3.27 日本軍800、再び県城を占拠。28日、城関で民衆30人を虐殺。

3. 梁正中と王国権、五台山で晋察冀辺区第1次党代表会議に出席（会議で涑源県が「対敵闘争模範県」とされる）。
- 4.13 県委と県政府、尚朝宗・蔣鳳岐・談正勲ら7人の漢奸を鎮圧。
4. 県委と各民衆団体、各種の訓練班を組織。積極分子の養成、民衆を発動して減租減息・合理負担を推進（積極分子入党、農村支部樹立）
5. 涑源の女性、八路軍のために1500足の布靴をつくる。
- 7.7 涑源の軍民、杜村で七七記念大会を開催。楊成武司令員・羅元発主任と県指導者の梁正中・王斐然らが大会に出席、地方武装を検閲。

このように、1937年9月の国民政府退出後の約1年間、涑源県は日本軍による3度の占拠と八路軍による奪回が繰り返された。38年10月、日本軍は4度めの占拠に成功し⁽¹³⁾、これ以降45年5月27日に退去するまで、同軍は涑源県を保持し続けることになる。これに対して、中共系政府は、所在地を井子会・走馬駅・銀坊・南馬庄に移して抗日闘争を展開するのであるが、このことは、涑源県の中共にとっての「強化段階」が、「樹立段階」のそれと明らかに異なった状況に置かれることになったことを示している。

すなわち、日本の華北統治にとって、晋察冀抗日根拠地の中心である阜平県に隣接し、なおかつ日本軍が県を占拠していた（日本軍から見れば最前線の拠点であり、八路軍にとっては遊撃区であった）という涑源県の状況は、晋察冀抗日根拠地の「強化段階」（涑源県の800日）が、日本軍と八路軍の軍事的対抗におけるひとつの焦点を形成することを意味していた。

右表（表1）は、日中全面戦争期における中共涑源県委員会の状況を示したものである。同県における中共党組織は、基本的に、八路軍の到来によって誕生したものであり、1937年末の220人から38年末の2136人、さらに40年末の3957人に着実かつ大幅に増加している。

表1 中共涑源県委員会の組織状況 [組織史資料 1991: 41]

時 間	区 委	支 部	党 員	統 計 依 据
1937,底		18	220	回忆统计
1938,底	7	216	2136	回忆统计
1939,底	13	216	3460	回忆统计
1940,底	8	212	3957	县委年终报告资料
1941,底	9	193	4537	回忆统计
1942,底	9	193	5134	回忆统计
1943,底	10	216	5996	回忆统计
1944,底	10	216	7860	回忆统计
1945,5	10	216	11533	档案统计资料

Ⅲ 資料の問題

日中全面戦争前期「涑源県の800日」における中共の実態を復元するために、どのよう

な資料を用いることができるのであろうか。

まず「800日」の実態にかかわる基本的事項を提供しているのは『涿源県志』[県志1998]である。もうひとつの編纂資料『中国共産党河北省涿源県組織史資料1933-1987』[組織史資料1991]は、当該時期・涿源県の党・政・軍系統の各組織と社会団体にかかわる具体的情報を提供する。

次に、中共涿源県委員会作成による数件の文献は、中共組織と基層社会との関連を検討しうる未公刊史料である（河北省档案馆所蔵）。このほか、未公刊史料としては「陸軍中将阿部規秀戦死ニ関スル報告」(駐蒙軍司令官岡部真三郎、アジア歴史資料センター所蔵)がある。

また晋察冀根拠地の中心地・阜平で発行されていた『抗敵報』『戦線』などには涿源に関わる情報が掲載されることがある。同時に涿源での状況が晋察冀根拠地の状況とどのように関連しているのかを理解するうえで有益である⁽¹⁴⁾。

楊成武や聶榮臻の回想録は、「涿源の800日」に関わる軍事的事跡を理解するうえで第一級の資料である⁽¹⁵⁾。

さらに、1938年に涿源で中共に入党し、晋察冀辺区の中共地区委員会や公安総局で活動した人物(劉玉)が執筆した抗日歴史小説『奔騰的拒馬河』(1994、中国工人出版社)がある⁽¹⁶⁾。「涿源県の800日」の実態をどのように復元しうるのかという点からすれば、著者が実際の体験をそのまま叙述していると思われる部分と小説としての創作部分を確実に分離することは困難である。とは言え、同書が、日中全面戦争勃発時の涿源に中共組織は存在せず、従って八路军とともに全くの外来者としてやってきた中共がいかにして涿源社会に定着し、確固とした政治権力として地域社会に定着していく過程を生き生きと描写している点で貴重である。

IV 県志に見る「涿源県の800日」

ここでは、『涿源県志』所収の「大事記」によって「800日」を日誌風に概観しておく[25-27]。

- 1938.10 日本軍、涿源県城を占拠（抗日民主政府、井子会・走馬駅・銀坊・南馬庄に移転して対敵闘争を展開）。
- 11.23 抗日民主政府、賑濟委員会を組織（日本軍による被災民に対する救済を実施）。
- 1939.1. 日本軍、県城に偽政府を樹立。
- 5. 涿源の婦人、装身具を抗日民主政府に献上（数千元にのぼる）。

- 7.2-8.29 48日の長雨。多くの村が水没、720余人が死傷、耕地74000畝・家屋6800が崩壊。
- 11.3-8 八路軍晋察冀軍区第1軍分区司令員・楊成武、県東南の雁宿崖・黄土嶺において掃討作戦中の日本軍を2度にわたって包囲（日本軍の阿部規秀中將が戦死）。
- 11初 カナダ人外科医ベチューン、医療隊を率いて易県管頭から涞源県孫家庄に到達。同村全神廟で救護活動を行う。手術中に細菌感染、のち唐県黄石口村で死去。
12. 日本軍、涞源で報復「掃討」を展開。幹部・民衆120を虐殺、家屋2万個を破壊するとともに1万石の食糧を略奪。
- 1940春 前年の大水害と日本軍の「掃討」により、解放区では深刻な食糧不足を招く。県委・抗日民主政府、春季生産自救・開墾運動を展開。
3. 日本軍、県城から王安鎮、水堡、腰站、唐県への公路建設に民衆を徴発。
- 5上旬 涞源で参軍ブーム（上級からのノルマを超過達成）。
7. 民主大選挙実施。三三制により県・区抗日政権の指導者を選出。
- 9.22 百团大戦第2段階の重要戦役：涞（源）靈（丘）戦役開始。八路軍独立師3団、東团堡の拠点を攻撃。3日の激戦により守備兵力170を殲滅。
- 9.23 楊成武司令員、独立師2団を指揮して三甲村の拠点を攻撃。4時間の激戦により日偽80余を殲滅（日本兵20余、偽兵50余を捕虜とする）。
- 9.23 インド医療隊、烏龍溝に到達。東团堡戦闘で負傷した八路軍戦士を治療。
9. 涞源県で第1回県議会開催。民主協商方式で議長を選出（県委書記李虓が兼任、胡少勲が副議長となる）。
- 9-11 八路軍第1軍分区所属部隊は涞靈戦役において56回の戦闘を行い、東团堡・三甲村・下北頭・張家峪・北石仏・中庄・上庄・劉家嘴・白石口など11拠点を攻略、600近くの日本兵を殲滅するとともに大量の武器弾薬を獲得した。
- 12下旬 涞源婦女会、第1回代表大会開催（趙偉、婦救会主任となる）。
- 年末 日本軍、県東部・烟煤洞などで石綿の採掘を強行。

V 組織史資料に見る「涞源県の800日」

[組織史資料1991]によって、我々は日中全面戦争期の涞源県の党・政・軍系統の各組織と社会団体にかかわる具体的情報を知ることができるのであるが、とりわけ県内におけ

る中共区委員会と行政区画の変遷に関する記述は、後述する中共涿源県委員会文書を読み解くために不可欠な極めて重要な内容をふくんでいる。1937年10月から本稿が考察の対象とする「800日」にいたる涿源県の政治編成には、以下の特色があった〔16-17〕。

- (1) 1937年10月、八路軍幹部の王茂斌を県長とする県政府が成立、それまでの行政区画に沿って6区に抗日救国会を組織して臨時的行政機構とした（12月、7区となる）。
- (2) 1938年4月、7区に党の区党委と区政府（公所）が成立⁽¹⁷⁾、工人・農民・青年・婦女抗日救国会が相次いで成立した。
- (3) 1939年4月、日本軍による県城占拠と新拠点構築という情勢をふまえて、7区を13区に改編した。40年初めに全県の武装を統括する抗日武装委員会が成立（武衛会）、区級武衛会も組織された。2月、涿蔚公路西側の10区を広豊県5区の管轄に編入した。
- (4) 1940年7月、県委は遊撃区の5、6、7、8、9、11、12、13区の編成替えを実施、区委と区公所を8区編成に改めた（1、2、3、4、5、7、9、10の各区）。

〔組織史資料1991〕には「初創抗日根拠地涿源県行政区画図」（1937.10-1937.12）と「抗日戦争時期涿源県行政区画図」（1942.7-1945.8）を収録するが、前者が旧来の行政区画を踏襲した6区編成であるのに対して、後者は抗日戦争時期における基本型としての10区編成であったことを示している。とすれば、1939年4月以降の13区編成と40年7月における8区編成への再編は、42年7月以降の基本型たる10区編成にいたる過渡的段階であったと理解することができる⁽¹⁸⁾。すなわち本稿が対象としている「800日」が、抗日戦争期涿源政治の再編期であったことの証左であろう。

図8と図9は、それぞれ1939年4月～1940年7月、1940年7月～1941年2月の時期の県内行政区画について、〔組織史資料1991〕の記載を参照し、「抗日戦争時期涿源県行政区画図」（1942.7-1945.8）に加筆するかたちで作図したものである。

VI 中共県委文献に見る「涿源県の800日」

筆者が見ることができた中共河北省涿源県委員会の文献は、「拡軍工作総結報告」1940年6月4日、「県選議員工作総結報告」11月1日、「關於爭取反掃蕩徹底勝利的初歩検査報告」11月9日、「1940年宣伝教育工作総結報告」12月30日、「關於双十綱領材料」1941年2月1日の5件である。このうち最初の4件は上部組織に提出した報告書であり、最後の1件は上部からの指示をふまえた会議におけるノートである。報告書4件のなかで、「拡軍工作総結報告」が県内の行政区画を1～13区として記載されているのに対して、「県選議員工作総結報告」「關於爭取反掃蕩徹底勝利的初歩検査報告」「1940年宣伝教育工作総結報告」

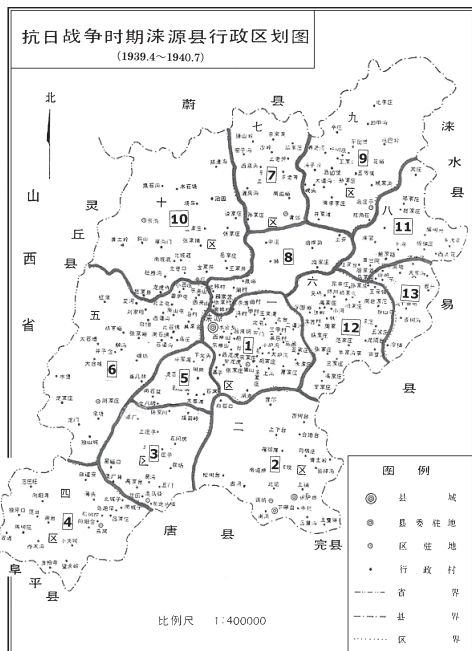


図8 涑源県の行政区画（1939年4月～1940年7月）[組織史資料1991] により筆者作成

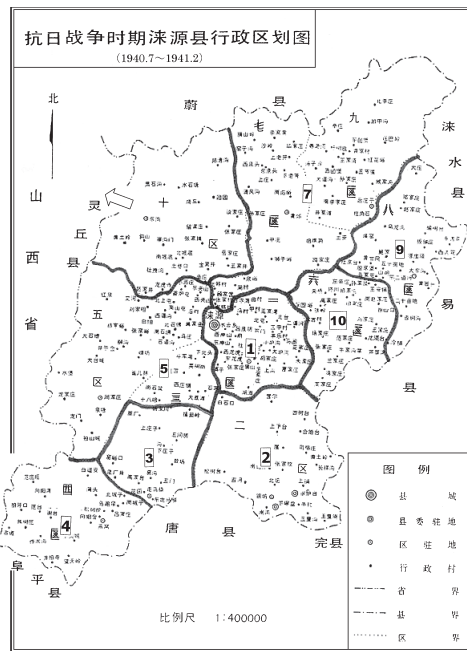


図9 涑源県の行政区画（1940年7月～1941年2月）[組織史資料1991] により筆者作成

が1～10区として記載されているのは、1940年7月における区画変更をふまえてのものである。ここでは、4件の報告書から看取しうる戦時涑源社会の実態を素描する。

1 拡軍工作総結報告（1940年6月4日）

表2は報告書に掲載された拡軍工作の総括表であるが、この総括は、県下の各行政区それぞれの実態を整理しながら行われている。そして、各区が根拠区であるのかそれとも遊撃区であるのかによって、拡軍工作のありかたが基本的に異なること、また「政治動員」と「行政動員」を区別し、前者が参軍の意義を自覚し自主的決断をもたらすものであるのに対して、後者は何らかの行政的圧力をともなうものとされ、本来前者によって展開されるべき拡軍工作が、実態として後者の側面も存在したと述べている。

各区（各村）間の拡軍競争が展開されていることは、県がひとつの政治共同体として機能していることを示している。同時に被災民や「抗属」（軍人を出している家族）の顕彰と生活保障が、拡軍工作の成否を決定する基本的条件であるとする認識が見て取れる。同時に報告は、拡軍工作に見られた欠点として、物質的優遇・騙し・事実上の売買など、[笹川・奥村2007] が同時期の四川盆地（重慶国民政府）の実態として提示したことがらと同じ現象が涑源でも起こっていたことが分かる。

表2 拡軍工作総括表

	原分配 数	完成数	青年成份		壮年成份		党員数	洗刷数	実交数
			工	農	工	農			
一区	25	42	7	23	3	2	1	7	35
二区	20	70	2	34		9	13	25	45
三区	15	47	1	9	2	12	6	23	24
四区	15	35		13		11	2	11	24
五区	20	27	4	7	3	5	1	8	19
六区	25	35	5	12	4	2	6	12	23
七区	20	21	5	6	1	5		4	17
八区	20	24	2	11	2	6	2	3	21
九区	40	36	1	13	2	11	4	9	27
十一区	20	30	7	3	6	4	4	10	20
十二区	20	61	11	20	5	8	17	17	44
十三区	15	48	10	13	1	9	12	15	33
総計	255	476	55	164	29	84	68	144	332

2 1940年宣伝教育工作総括報告（12月30日）

本報告書は、a. 一年来の総括、b. 幹部教育、c. 支部教育、d. 対外宣伝工作、e. 大衆に対する宣伝教育工作、f. 国民教育工作から構成されている。このうち「国民教育工作」部分は、1940年段階で涿源県政府が掌握する教育の実態を提示している。以下、この点に関わる4つの表を掲げる（表3～表6）。

この4表が県内行政区域を1区～10区としているのは、1940年7月の区画変更をふまえてのものであり、6区と8区を欠番とする計8区の編成である⁽¹⁹⁾。また遊撃区教育の状況を示す表6から、この段階において2区と4区の両地区が根拠区であったことが見て取れる⁽²⁰⁾。

表7は、1939年と1940年の冬学運動（業余教育）の状況を整理したものであるが、2区と4区における顕著な発展状況は、冬学運動が民主政府による地域社会の掌握を背景として展開されたことを別の側面から示している。

3 關於争取反掃蕩徹底勝利的初步検査報告（11月9日）

この報告書は、日本軍・偽政権の肅清工作に民主政権がどのように対処しようとしたのかという点についての実態を見て取れる。

表8は1940年12月の「冬季掃蕩」によって各区が蒙った損失の統計である。この軍事作戦が、民主政府の拠点区である2区と4区に対して重点的に行われたことを示している。

表9は2区の損害を村別に整理したものであるが、根拠区において民主政権が行政村のレベルでどの程度まで掌握していたのかを具体的に提示している点で興味深い。

表3 各区小学校教育統計表

	高小	人数	初小	人数	輪学廻校	人数
一区						
二区			14	29	6	50
三区	1	5	14	215		
四区			18	36		
五区			3	68		
六区						
七区			15	148		
八区						
九区	2	50	25	490	1	29
十区	1	40	27	450		
共計				1436		

表4 学校数と行政村数の比較表

	行政村	学校数	有学校村莊百分数	備考
一区	37			
二区	24	20	80	
三区	22	7		
四区	21	18	90	
五区	24	3		
六区	29	16		現未成立
七区	23	15	50.3	
八区				
九区	23	27		
十区	29	27		

表5 小学校における男女児童数の比較

	男生	女生	学生総数
一区	73	21	94
二区	18	16	34
三区	195	20	215
四区	120	80	200
五区	50	18	68
六区			
七区	178	15	193
八区			
九区	310	180	490
十区	310	140	450

表7 冬学運動の状況

		1939年	1940年	増加数
一区	校数			
	人数			
二区	校数	14	31	17
	人数	280	640	360
三区	校数		14	
	人数		215	
四区	校数	8	23	15
	人数	120	460	340
五区	校数		5	
	人数		120	
六区	校数		2	
	人数		40	
七区	校数		2	
	人数		45	
八区	校数			
	人数			
九区	校数		28	
	人数			
十区	校数	25	35	10
	人数	500	450	

表6 遊撃区における教育の状況

	小学校	学生数	民校数	学生数
一区	4	94	2	90
二区				
三区	7	110		
四区				
五区	3	68	5	120
六区			2	40
七区	15	148	2	45
八区				
九区	25	490		
十区	97	45	35	600

表8 1940年冬季掃蕩各区損失調査統計（1940年12月）

	一区	二区	三区	四区	五区	六区	七区	八区	九区	十区
房間（間）	97	92	10	700						218
糧食（石）	115.7	175	200	250	37					500
什器（元）	823	17102.3								
牛（頭）	10									
羊（頭）		27		6						
ロバ（頭）	8	12		1						
負傷（人）		1						3		
死亡（人）		3		5				4		

表9 第二区損失調査統計（1940年12月）

村名	房間（間）	糧食（石）	什器（元）	羊（頭）	ロバ（頭）	負傷（人）	死亡（人）
銀坊	60	46.34	2039		4		
吉何	30	15.22	1150		1		
松樹台		3.6	410				
安南宅		24.72	3883.5		3		
上下台	21	15.28	1745	27			
北壇		23	2600			1	2
張家純		4.77	236.3				1
雁宿崖		0.48	252				
銀炉台		0.56	1059.5				
下碾盤	11	27	3074		2		
西流水	30	0.01	40				
司各庄		5.38	427				
黄土嶺		3	65				
玉里溝		1	80				
陳家舖		1.2	40		2		
総計	92	175	17102.3	27	12	1	3

4 県選議員工作總結報告（11月1日）

県議会議員選挙について、上述の県志は、1940年7月に民主大選挙を実施、9月に第1回県議会を開催、県書記李虓が議長となった、と記している。

県委報告書は、県下各区で投票に参加した男女別人数を表10のように報告している。

この表における6区と8区がどの部分を指すのかについてはさらに検討しなければならないが、公民総数72897人、投票者43219人で投票率は59%であった。根拠区である2区と4区の投票率が93%、84%と高く、県城をふくむ1区が32%であることと明らかな対照をなしている。

表11は、当選者の状況を整理したものである。

報告書から看取しうる選挙工作は、誰を、あるいはどのような勢力を当選させるのかということよりも、老人や病人、女性、少年など基層社会を構成するすべての成員をいかにしてこの選挙に参加させるのかという点に集中されていたように思われる。すなわち、この投票行為に動員することによって、地域社会による県政権に対する正統性の調達が目指された。さしあたり、当選者で女性・25歳以下・貧農および中共党員の当選者の多さは、こうした事情を反映したものであったとしてよいであろう。

同時に、この選挙は、晋察冀辺区の各県で並行して実施されたものであり、国共合作下の地域権力の正統性をどのように調達するのかという課題をふまえたものであった⁽²¹⁾。

表10 県議会選挙の投票数と投票率

	公民総数		参選人数		百分比
	男	女	男	女	
一区	15208		4903		32
	8429	6779	3324	1579	
二区	3842		3578		93
	2240	1602	2064	1514	
三区	7060		6089		88
	3849	3211	3315	2769	
四区	4643		3903		84
	2608	2035	2207	1696	
五区	5866		5061		86
	3225	2641	3030	2031	
六区	8844		3009		34
	4374	3470	1942	1097	
七区	7555		3922		51
	4371	3184	2345	1577	
八区	4960		3968		80
	3869	2091	2121	1847	
九区	4730		4379		92
	2643	2077	2423	1954	
十区	5175		4437		85
	2887	2288	2579	1861	
総計	72897		43219		59

表11 県議会選挙の当選者

	性別		50歳以上	25歳以上	25歳以下	成分						党員	非党員	
	男	女				工人	僱農	貧農	中農	富農	地主			知識分子
正式	33	5	6	25	7	1		12	12	1	4	8	26	12
	38													
候補	9	2		5	6			3	5			3	8	3
	11													
計	49		6	30	13	1		14	17	1	4	11	34	15

Ⅶ 4枚の写真から見る「涞源県の800日」

ここまで組織史資料と中共县委文献によって、「涞源県の800日」における中共の活動

を県内各区地域社会の状況との関連で整理した。

涿源県が日中全面戦争期における日本軍と八路軍との典型的な係争地域であったため、全国的な中国政治あるいは日中戦争全体に関わる事件が「涿源県の800日」で発生した。ここでは4枚の写真を素材として、中国政治・日中戦争と涿源地域社会がどのように関連づけられていたのかを考える。

1 1939年11月7日 阿部規秀中将を爆死させた迫撃砲

図10は、『涿源県志』『楊成武回憶録』では上記のキャプションを付して収録している⁽²²⁾。1939年5～12月における晋察冀根拠地山岳部に対する日本軍の軍事作戦は、八路軍主力部隊の包圍殲滅・交通路の遮断・根拠地の拠点攻撃を目的としていた。これに対して、聶榮臻指導下の晋察冀軍区は、各部隊を機動的に運用することによって応戦したが、在地の民兵組織や大衆団体による支援はそれを効果的に遂行するうえで不可欠であった。

涿源における将軍の戦死が遺族の動静とともに朝日新聞などで報道され⁽²³⁾、蒋介石軍事委員長も朱徳総司令に祝捷電報を發したという。

2 1939年10月 ベチューン医師による涿源県孫家庄・小廟での戦傷者に対する手術

図11は『涿源県志』所収の写真である⁽²⁴⁾。カナダ人医師ノーマン・ベチューンは、1936年スペイン内戦で人民戦線外国義勇隊に参加するとともにカナダ共産党に入党。38年、カナダ・米共産党が派遣す



図10



図11

る医療隊を率いて延安に赴いた。彼は、涿源県の雁宿崖・黄土嶺戦闘での八路軍戦傷者の治療にあたった。11月、手術中の細菌感染のため隣接する唐県で亡くなった。

3 1940年百団大戦第2戦役における敵士官大隊殲滅後の勝利の歓呼

図12に対する上記のキャプションは『楊成武回憶録』所収の写真に付されたものである⁽²⁵⁾。これに対して、中国共産党歴史資料叢書『晋察冀抗日根拠地』にも同一の写真が納められているが、そのキャプションは「百団大戦期間に晋察軍区の某部隊が河北涿源県東団堡を攻略した。図は戦士たちが長城の烽火台上での勝利の歓呼である」としている。

この百団大戦と東団堡を攻略、そして長城の烽火台はどのような関係にあるのであろうか。

百団大戦は1940年8月～41年1月に八路軍が行った軍事攻勢であり、正太（石家庄～太原）鉄路の破壊を主たる内容とする第1段階、交通線の破壊と、交通線の両側および根拠地に入り込んだ日本軍拠点の奪取をめざす第2段階、日本軍による報復「掃討」作戦への反撃の第3段階に区分される。

第2段階の一部をなす涿（源）靈（丘）戦役において、晋察冀軍区の各部隊は涿源県城と県内の日本軍拠点の奪取を試みた。9月22-23日、県城攻略はならなかったが、三甲村と東団堡をふくむ十余の拠点を攻略した。なかでも日本軍教導隊（教育キャンプ）170人による東団堡拠点〔県志594-595〕では壮烈な攻防戦が展開された。八路軍の指揮部は全県の動向を鳥瞰しうる長城烽火台に設けられたが〔楊成武回憶録〕、上の写真は東団堡戦闘での勝利の歓呼である⁽²⁶⁾。

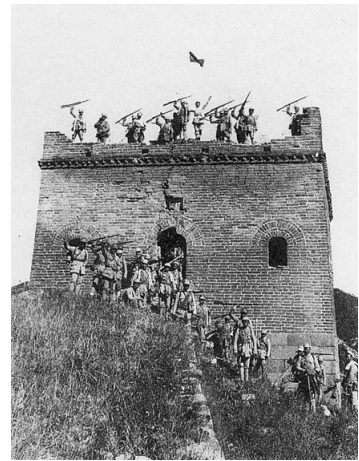


図12

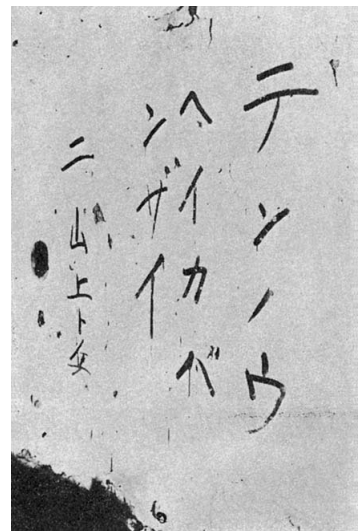


図13

4 東團堡⁽²⁷⁾ 玉碎部隊の遺した壁書

図13は『北支の治安戦』所収の壁書である〔361〕。

〔岳思平論2005〕は「重大な打撃を受けた涿源の日本軍は3000人の兵力を集中して猛烈に反撃し、10月1日には晋察冀軍区各部隊に攻略した大部分の拠点を奪回した」としている〔228〕。一方『北支の治安戦』は、「中

共軍は、のちに両守備隊陣地（東圈堡と三甲村）から撤退するとき“当陣地の日本軍守備隊はよく敢闘せり”と壁書きして去ったとのことである」と記している〔戦史室1968：361〕。

VIII 中国抗日戦争と涿源の抗戦

涿源の抗戦が中国抗日戦争に関わるもうひとつの事例は、王二小言説の形成である。

王二小は1929年涿源县上庄で生まれた。父は長工、母は針仕事をして生活を支えていた。日中全面戦争下で彼は児童団員となり、また牧童として牛の管理に当たっていた。1941年9月16日、冬季掃討作戦遂行中の日本兵は山中で二小に遭遇、道案内をさせた。彼は、機転を利かせて日本軍を涿源县黒庄郷狼牙口付近の八路軍待ち伏せ地点に誘導した。これに気づいた日本兵は二小を射殺、日本兵も八路軍に殲滅された。涿源县青年救国会幹部・張士奎はこの事件を辺区青年救国会に報告、それは『晋察冀日報』に掲載された。この報道は、1942年、この報道をもとにしてつくられた「歌唱二小放牛郎」（方冰作詞・劫夫作曲）はまたたくうちに全国の抗日根拠地に広まっていった⁽²⁸⁾。

王二小が犠牲になったのは「涿源県の800日」の後であるが、児童団員に加入していた彼が犠牲にならざるを得なかった直接の原因は、まさに「800日」という環境に規定されていたとすることができよう。

上に述べたように、百团大戦で八路軍が攻略した拠点の大部分がほどなく日本軍に奪回された。このことは、涿源县をめぐる日本軍と八路軍との力関係を反映したものであったが、その一方で、県城を日本軍に統治されながら、1941～43年の涿源县の中共黨員数が着実に増加していったことはたして何を意味するのであろうか⁽²⁹⁾。この点は、涿源という地政空間が本稿で対象とした「800日」から1940年代前半期にむけてどのような変容を遂げたのかという問題にほかならないが、少なくとも日本軍には、涿源县地域社会に新たな深度と拡がりをもつ政治権力として自らを定着させる条件を有していなかったと言わねばならない。

1945年5月27日、日本軍部隊は県城を放棄して北方に撤収、これにともない中共涿源县委と政府は東劉家庄から県城に戻った。6月2日、县委は東大廟で全県群集慶祝中共涿源解放大会を実施（図14）、7月7日、県城の水心亭は烈士亭に改められた〔県志29〕。

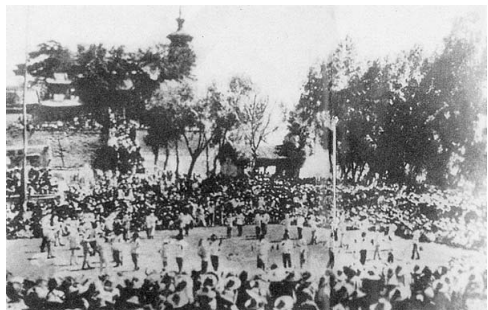


図14 涿源解放大会〔県志1998〕

IX 涑源をめぐる戦争と革命の記憶

1978年12月、中共指導部における鄧小平のリーダーシップを確立した中共11期3中全会は、継続革命論を否定して中国を「革命」の時代から「改革・開放」の時代に転換させた。さらに中共は、81年に「歴史決議」を採択、「文化大革命」は党と国家・人民に「建国以来最大の挫折と損失」を被らせた動乱であり、その主たる責任は毛沢東にあると規定された。こうして1949年の人民共和国にいたる中国革命の軌跡は、「改革・開放」の時代に適合的な変容を加えられながら、再定置されていくことになる。

1988年9月竣工の「雁宿崖黄土嶺戦役勝利記念碑⁽³⁰⁾」は、涑源县におけるこうした意味での代表的なモニュメントであるとしることができよう（図15）。

1980年代の中国社会の変容と89年の天安門事件、その後の東西冷戦の崩壊（東欧革命とソ連の崩壊）によって、中国社会の統合理念としての「革命」の語りもまた、なんらかの再編を要請されることとなった。

図16は、1995年9月3日に「ベチューン手術室」の前方に立てられた立像である。立像の前面に「白求恩大夫伝略」、左右に聶榮臻と呂正操による碑文を配している。ここでは背面の「祭白求恩大夫碑文」を記しておく。



図15 雁宿崖黄土嶺戦役勝利記念碑 [県志1998]

白求恩大夫以高尚的国际主义精神，忘我的工作热忱，为中国人民的解放事业做出了突出贡献。白求恩大夫在涑源工作的日日夜夜，每涑源人民结下了深情友谊，中国人民怀念他，涑源人民怀念他。时值世界反法西斯战争胜利五十周年和中国人民抗日战争胜利五十周年纪念之际，中共涑源县委员会、涑源县人民政府、中共天津市河东区委员会、天津市河东区人民政府决定联合修建国际共产主义战士白求恩大夫染指的孙家庄



図16 ベチューン手術室 [筆者撮影2008年9月]

小廟，并由共青团涿源县委员会和涿源县民政局筹资施工修建，其中曾得到社会各界的慷慨解囊。(捐资单位附后)在此表示谢意。为光扬白求恩精神，缅怀英烈，教育后人，立此碑以志永垂。

この祭文が涿源县と天津市河東区の中共委員会・人民政府によって執筆されている点は「雁宿崖黄土嶺戦役勝利記念碑」と同じであるが、同時に社会各界からの募金単位を刻している点は「改革・開放」期中国社会のある種の変容を反映しているように思われる⁽³¹⁾。

抗日歴史小説『奔騰的拒馬河』の出版は1994年である。その「後記」によると、同書を執筆することになったきっかけは、1983年3月に中共涿源县委が北京で開催した涿源抗日戦争史および党史資料収集に関する座談会にあった [581]。著者は、1987年以降業余の時間を用いてインタビューや関連資料を収集、それらに基づいて同書を執筆した。編者の按語は「作者はひとりの普通の農民の角度から、農民特有の素朴な眼と鮮明な愛憎、彼ら特有のロジックによって、身边で起こった多くの史実に対して、彼らが熟知している演繹の方法によって叙述している」としている。同書の巻頭に王国権・穆春林・高瑞啓・崔洪春ら县委書記・県長による揮毫がおかれていることは⁽³²⁾、同書によって提示された涿源をめぐる「戦争＝革命」像があるべき「真実」を提示したものとして社会的公認を得ているとしてよいであろう。

1992年の全面的市場化（鄧小平の南巡講話と「社会主義市場経済」）以降、中国は着実な経済成長を実現するとともに新たな変容を遂げていく。それはポスト革命時代の到来でもあり、社会が「革命」をどのように捉えるのかという点においても、それまでとは異なる様相を確認することができる。

王二小希望小学は、1997年、希望プロジェクトの援助を受けて建設された。図17は校庭にあるモニュメントと花壇であり、北京市王淵潭中学、華北大学、北京児童図書館、上庄ガソリンステーションなどの多方面から寄せられた寄金によって作られた⁽³³⁾。このように、党組織や政府ではないさまざまな団体が「戦争と革命の記憶」に参加しつつあることが見て取れる。

涿源におけるもうひとつの事例は、農民による記念館建設である。涿源の農民趙順



図17 王二小希望小学 校庭のモニュメント
[筆者撮影2008年9月]

成は、黄土嶺地区の紅色ツーリズムのプロジェクトを請け負い、自ら40万元を出すとともに、30万元を借り入れて記念館を建設した(図18)⁽³⁴⁾。

これらは、今日の涿源社会(や個人)がかつての涿源における「戦争と革命の遺産」をそれぞれの生活戦略のなかに位置づけそれに沿ったかたちで活用しようとしているすがたを看取することができる。



図18 趙順成が建てた記念館 [筆者撮影2008年9月]

ま と め

最後に本稿が考察の対象とした「涿源県の800日」の歴史的射程にかかわる2つの論点を提示しておく。

図19は、今日の中共東団堡郷委員会東団堡郷・人民政府の正門の様子である⁽³⁵⁾。正面に毛沢東による「人民に服務せよ」の額があり、さらに中心部分に国旗と国徽を配置する構造は、北京・中南海の新華門のそれと同じである(図20)。

このように1949年10月に中華人民共和国を成立させた中国革命は、中央一省(河北)一市(保定)一県(涿源)一鎮・郷(東団堡)という各レベルにおいて政府と党組織が並列し、なおかつ基層の行政機構が末端の行政村を掌握するという編成は、涿源県の場合、まさに日中戦争前期の「800日」に確立したとすることができる。

もうひとつの論点は、抗日歴史小説『奔騰の拒馬河』が提示する「革命と戦争」像に関



図19 中共東団堡郷委員会、人民政府の正門 [筆者撮影2008年9月]



図20 北京、中南海の新華門

わる問題である。本書は、日中全面戦争勃発によって八路軍とともに涿源に到来した中共が涿源社会に定着し、確固たる権力を樹立していく過程を活写している。そして涿源で展開される抗戦と革命は、たとえばベチューンのような外国人医師の献身に応えうる崇高かつ普遍的価値を有するものとして叙述される。これと対照的に、「侵略者たる日本軍」は、殺人と凌辱の限りを尽くす人間性を喪失した存在として記号化されることになる。確かに「ひとりの普通の農民の角度から、農民特有の素朴な眼と鮮明な愛憎、彼ら特有のロジックによって、身近で起こった多くの史実に対して、彼らが熟知している演繹的方法によって叙述」したとき、このような日本軍（人）像が描出されることはひとまず理解することができる。とはいえ、日中全面戦争期の中国においてさまざまな領域で生活していた「日本人」の実像をどのように描きうるのかについて熟考することは、私たちに課されたもうひとつの重要な課題であるとしなければならない。

参考文献

- 中共涿源县委委員会 1940.6.4 拡軍工作総結報告（河北省档案館520-1-255-1、油印）
- 中共涿源县委委員会 1940.11.1 県選議員工作総結報告（河北省档案館520-1-252-16、油印）
- 中共涿源县委委員会 1940.11.9 關於争取反掃蕩徹底勝利的初歩検査報告（河北省档案館520-1-255-10、油印）
- 中共涿源县委委員会 1940.12.30 1940年宣伝教育工作総結報告（河北省档案館520-1-254-3、油印）
- 中共涿源县委委員会 1941.2.1 關於双十綱領的総結（河北省档案館520-1-254-9、手筆）
- 中共涿源县委委員会・涿源県人民政府ほか 1995 祭白求恩大夫碑文
駐蒙軍司令官岡部真三郎 「陸軍中將阿部規秀戦死ニ関スル報告」（アジア歴史資料センター C07091447900）
- 抗敵報 1940.9.26（号外）
- 東京朝日新聞 1939.11.22、25、26、27
- 中国人民抗日戦争紀念館 2005 偉大勝利：紀念中国人民抗日戦争暨世界反法西斯戦争勝利60周年大型主題展覽（パンフレット）
- 郭利民編 1993 中国新民主主義革命時期通史地図集、中国地図出版社
- 河北省涿源県地方志編纂委員会編 1998（〔県志1998〕と表記） 涿源県志、新華出版社
- 河北省社会科学院歴史研究所ほか編 1983（〔河北省ほか編1983〕と表記） 晋察冀抗日根拠地史料選編・上冊、河北人民出版社
- 晋察冀抗日根拠地史料叢書編審委員会ほか編 1988（〔晋察冀ほか編1988〕と表記） 晋察冀抗日根拠地・文献選編上、中共党史資料出版社
- 劉玉・劉振堂 1994 奔騰の拒馬河、中国工人出版社
- 孫楊冰編 2005 聶榮臻元帥回憶録、解放軍出版社
- 楊成武 1987 楊成武回憶録・上、解放軍出版社

- 楊雪冬 2002 市場發育、社会生長和公共權力構建：以県為微視分析單位、河南人民出版社（公共管理研究叢書）
- 岳思平編 2005 八路軍、中共党史出版社
- 中共涿源县委組織部編 1991（〔組織史資料1991〕と表記） 中国共産党河北省涿源県組織史資料：1933-1987
- 田中仁 2009 抗日戦争前期中国共産党的党軍關係初探：中共党史研究的再考察（中国社会科学院近代史研究所民国史研究室ほか編、一九四〇年代の中国、上巻、社会科学文献出版社）
- 池田誠ほか 2002 図説中国近現代史（第2版）、法律文化社
- 江口圭一 1988 日中アヘン戦争、岩波新書
- 笹川裕史・奥村哲 2007 銃後の中国社会：日中戦争下の総動員と農村、岩波書店
- 西村成雄 1991 中国ナショナリズムと民主主義：二〇世紀中国政治史の新たな視界、研文出版
- 防衛庁防衛研修所戦史室 1968（〔戦史室1968〕と表記） 北支の治安戦1（戦史叢書18）、朝雲新聞社
- 田中仁 2002 1930年代中国政治史研究：中国共産党の危機と再生、勁草書房
- 田中仁 2007 “終戦”“抗戦勝利”記念日と東アジア（西村成雄・田中仁編、現代中国地域研究の新たな視界、世界思想社）
- 田中仁 2008 日中戦争前期における中国共産党の党軍關係について（西村成雄・田中仁編：中華民国の制度変容と東アジア地域秩序、汲古書院）
- 老普 2005 黄土嶺有關消息（2005/11/10、<http://www.thegreatwall.com.cn/phpbbs/index.php?id=56064&frumid=1>）
- 老普 抗日少年英雄王二小（華岳論壇より摘録、<http://www.laiyuan.com.cn/00/file/lyxd014.asp>）

註

- (1) [田中2008、2009] は、1338年11月から1941年1月にいたる中共権力中枢部分の党軍關係の実態について、組織史資料・年譜・電報を素材として検討を加えた。該文で確認された主たる論点は、次のとおりである。(1) 集団指導体制を前提とする政治局・書記処の分業という制度設計にもとづく規定が設けられたが、実際の会議の開催状況を見るとこうした制度設計は円滑に機能しなかった。(2) 同時期の中共文書に多数存在する「中央」とのみ記された文献は、実質的に延安に在住するすべての政治局員のコンセンサスを前提としていた。(3) 中共中央軍事委員会は1937年8月に発足した段階では延安在住のすべての軍指導者を網羅していたが、八路軍が前線に出動して以降、委員会の意思は事実上毛沢東主席・王稼祥副主席により具体化されることになった。
- (2) 2005年、中国人民抗日戦争記念館（北京）で抗戦勝利60周年を記念する大規模な展示が実施された（中共中央組織部、中華人民共和国文化部、中国人民解放軍総政治部などが主催）。同展示のパフレット『偉大勝利』（25頁）は、(2) ノーマン・ベチューンの記憶、(3) 日本軍の拠点・東田堡の奪取にかかわる写真（本稿の図11と図12）を収録している。
- (3) [県志]によると、1945年9月の中共支部数は251、党員数は11533である。一方1949年9月のそれは、259支部・13829人である [473]。
- (4) 同県の北東部から南西部にかけて内長城線が縦断していたことは、蒙疆政権が涿源県の統治を主張する根拠となった。

- (5) 八路軍の兵員数は、「樹立段階」が80000 (1937)～156700 (1938)、「強化段階」が270000 (1939)～400000 (1940)；「困難な闘争と回復の段階」は305000 (1941)～339000 (1943)、「局部反攻・全面反攻と大発展の段階」が507620 (1944)～1028893 (1945)である。「樹立段階」から「強化段階」にかけて着実に増加し、「困難な闘争と回復の段階」が暫減・停滞、「局部反攻・全面反攻と大発展の段階」に急速に増加する。
- (6) [晋察冀ほか編1988：9-14]。
- (7) 楊成武独立団は平綏路・平漢路北段に挺進、涿源・広靈・靈丘・蔚県・陽原・渾源・易県を攻略して辺区北部を開拓した。
- (8) 1938年4月、西＝平漢、東＝津浦、北＝平津、南＝滄石路に囲まれた冀中平原根拠地が樹立された。さらに同年3月、八路軍部隊は平西・冀東地区に進出したが、10月に一部部隊を残して撤退した。
- (9) 冀中地区では、城壁の取り壊し・公路の破壊・道溝工事によって平原の地形を改造、また24の県城の城壁を撤去した。
- (10) [晋察冀ほか編1988：14-20]。
- (11) 1938年12月、中共は120師主力を冀中地区に投入した。
- (12) その典型が博野事件・深県惨案である。これに対して中共は、「有理・有利・有節」にもとづく闘争を展開した。
- (13) 1938年8月、中共涿源県委は数千の民衆を発動して東西北の城壁を撤去した。[県志1998：25]
- (14) [河北省ほか編1983] [晋察冀ほか編1988]などの資料集もまた、同様の位置づけを与えようであろう。
- (15) このほか、当時の回想資料は『涿源県文史資料』に見出すことができる。
- (16) 共著者・劉振堂は涿源の小学校教師から党・政府の職員を歴任した人物である。
- (17) 1938年1月、国民政府行政院の承認・批准によって、晋察冀行政委員会は地方政府としての認知を受けた。この後、同委員会が設置した冀西・晋東北・冀中政治主任公署（專署）によって県長が委任された。この県政権の性格の変化は、県内の区級行政機構における臨時行政機構「抗日救国会」から正規の区政府たる公所への再編をもたらした。この間の涿源県長は、王茂斌（軍人、1937.10～11）、朱遵斌（軍人、1937.11～12）、張蘇（1938.1～2）、王斐然（1938.2～1939.2）である [組織史資料1991：20-21]。
- (18) 表1において、区委員会の数は、1939年末が13、40年末が8である。これに対して、41年末、42年末、43年末、44年末、45年5月がそれぞれ、9、9、10、10、10である。
- (19) 6区について、表4の備考で「現未成立」とし、表6で同区の「民校数2」「学生数40」としていることは、区画変更がなお試行段階にあったことによるものであるように思われる。
- (20) 同時に表3、表4から、日本軍と傀儡政権による統治によって、県城をふくむ1区に対する中共系政権の関与が極めて困難であったと推測される。
- (21) 20世紀中国政治を、中央政府・地方政府・地域権力・地域社会の4層によって捉えることについては [西村成雄1991：49-53] を参照。また、日中全面戦争期の中共権力が地方政府と地域権力の両面的性格を有していたことについては [田中仁2002：38-60] を参照。
- (22) 岳思平主編『八路軍』も同じ写真を収録している。キャプションは「1939年11月、黄土嶺での伏撃戦闘において八路軍は日本軍阿部規秀中将以下900余人を殲滅した。図は八路軍が日本軍陣地に迫撃砲をまさに発射しようとしている」としている [179]。

- (23) 東京朝日新聞、1939年11月22日朝刊11面、夕刊1面、2面、25日朝刊7面、26日朝刊11面、27日夕刊2面。
- (24) 『涑源文史資料』第1輯（1996）にも同じ写真を収録している。
- (25) 同じ写真を掲載する『涑源県志』のキャプションもこれと同じである。
- (26) この戦闘で日本軍は毒ガスを用いて応酬した。阜平で発行していた『抗敵報』は、東団堡と三甲村での勝利の号外を発行している（1940年9月26日）。
- (27) 当時「東團堡は東団堡とも称した」[戦史室1968：361]。
- (28) 老普「抗日少年英雄王二小」。
- (29) 図4に示される1941～43年における中共系軍隊（八路軍）の停滞・漸減状況と、表1が示す同時期の涑源県中共黨員数増加傾向との関連をどのように理解するのかという問題である。
- (30) 碑文には「中共涑源市委員会、涑源県人民政府1987年8月1日立」と記している。
- (31) 筆者は、戦後60年の終戦記念日（8月15日）と抗戦勝利記念日（9月3日）における日中台の新聞社説を概括したことがある [田中2007]。1995年8～9月、日本国内では「国会不戦決議」をめぐる、また中台では兩岸関係の捉え方をめぐって、それぞれのメディア空間における言説上の明確かつ相互に調整困難な対抗軸が出現し、なおかつ両者の間には構造的な関係を見出しうると主張した。この祭文も、こうした文脈のなかで理解することができるように思われる。
- (32) 穆春林と高瑞啓は1992～94、94～97年の中共県委書記、高瑞啓と崔洪春は92～93、94～97年の県長である [楊雪冬：198、202]。
- (33) 図17背面の碑文。
- (34) [老普2005]。一階に「抗日戦争勝利文物展覧館」、二階に「楊成武記念館」という表示（扁額）を掲げている。
- (35) 今日の涑源県は6鎮11郷よりなり、そのうち東団堡郷の人口は1.43万人で、19の村民委員会を擁している。